博士学位論文審査要旨

申請者　　馮　超鴻（早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程在学）
論文題目　　近世玉藻前説話の研究
　　―和漢比較文学の視点から―
申請学位　　博士（学術）
審査委員
　主任　　堀　　誠　早稲田大学教育・総合科学学術院 教授　博士（学術）
　　中嶋　隆　早稲田大学教育・総合科学学術院 教授　博士（文学）
　　内山精也　早稲田大学教育・総合科学学術院 教授　博士（文学）
　　三田明弘　日本女子大学人間社会学部 教授　　博士（文学）

１、本論文の目的

「玉藻前」の名は、那須の「殺生石」と結びあって今日まで日本の文学風土に強く息づいている。正体は天竺、震旦を経て日域に渡来した狐と伝えられる。この狐変の妖婦をめぐる話譚は、中世の御伽草子や謡曲に生いなり、近世の時代に話譚として大いに変貌を遂げて、一大妖異の花を咲かせる。

本論文は、この玉藻前の話譚をめぐって、日本と中国の狐変妖婦譚の歴史を辿り、かつ玉藻前説話の源泉と展開を追うとともに、近世の文学を対象として『絵本三国妖婦伝』(1803年上編刊、1804年中編刊、1805年下編刊）と『画本玉藻譚』（1805年刊）という二つの読本の成立までの時期に焦点を当て、近世に入って玉藻前説話が「どのように発展して変化してきたのか」、「変化の過程において、如何に漢籍の影響を受けたのか」の二点を主要な問題に掲げ、日中両国の文学に広く目を向け、和漢比較文学の角度から文学的考察を展開することを企図する。その際、玉藻前の話譚を題材とする作品を自らの眼を通して渉猟し、それらの作品に対する分析を通して研究考察の土台を固め、それらを時系列に沿って考察軸に据えると同時に、同時代の他のジャンルの作品にも眼を向けて、近世の玉藻前説話群をマクロの視点から俯瞰することを志向する。

近世の玉藻前説話の大きな変化は、「玉藻の草子」以来の女妖の前身の系譜に殷の妲己が組み込まれる点にある。『勧化白狐通』（明和三年〔1766〕刊）において、妲己が花陽夫人・玉藻前と連綴して三国伝来の狐変妖婦の系譜を構成するにいたるが、それ以降、妲己の話譚が花陽夫人譚、玉藻前譚とともに、三国物としての狐変妖婦譚の話容を構成していく様相の考察が研究の大きな眼目ともなる。考察は、近世において『勧化白狐通』刊行の明和三年〔1766〕以前を「始動期」、その刊行後から読本『絵本三国妖婦伝』刊行前年の享和二年〔1802〕までを「転換期」、その後の『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』の二つの読本が出版された享和三年〔1803〕から文化二年〔1805〕を「隆盛期」に区分する。

上記の一連の考察を通して、近世の「隆盛期」にいたる玉藻前説話の形成と発展を系統的に解明するとともに、近世文学と中国文学との交渉の様態を追究し、その展開相を史的にあらためて位置づけることを研究の目的とする。

２、本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序　章

一、研究背景

二、玉藻前説話の源泉

三、先行研究

四、問題提起と章節構造

第一章　始動期の様相

第一節　明和以前の玉藻前説話

一、問題提起

二、狐変妖婦譚の概観

三、三国伝来の系譜

四、妲己の浸透

五、後世への影響

第二節　『通俗武王軍談』の翻訳――妲己譚を中心として

一、先行研究と問題の所在

二、翻訳の底本

三、翻訳の工夫

四、誤訳について

五、『絵本三国妖婦伝』における『全像』本の反映

第二章　転換期の様相

第一節　『勧化白狐通』の位置：継承と発展

一、問題の所在

二、著者海誉と『勧化白狐通』の内容

三、「玉藻の草子」の継承と発展

四、『勧化白狐通』の独自の発想

五、『勧化白狐通』の意義

第二節　『三国悪狐伝』の伝本について

一、問題の所在

二、伝本の分類

三、祖本の推定

四、結語

〈附表〉調査した二十六本『三国悪狐伝』の伝本の書誌的情報

第三節　『三国悪狐伝』と近世の狐譚

一、問題の所在

二、『通俗呉越軍談』と『通俗武王軍談』の利用および加工

三、『勧化白狐通』と「玉藻の草子」の利用
四、『安倍晴明物語』と『安倍仲麿入唐記』の利用
五、結語
第三章　隆盛期の様相
第一節　『絵本三国妖婦伝』の「修飾」をめぐって
一、問題提起
二、玉藻前の形象の改変
三、狐変褒姒の処理
四、漢詩の加工
五、結語
第二節　『画本玉藻譚』生成考――狐変妖婦説話との関わりを中心に
一、問題の所在と先行研究
二、狐変妖婦説話の受容、および話中で施された変化
三、『三国悪狐伝』の影響
四、結語
第三節　『画本玉藻譚』生成続考――三国物を為す手法に着眼して
一、三国の趣向
二、「花陽夫人譚」の仏国の形象
三、「玉藻前譚」に見える怪異の形象
四、結語
第四節　玉藻前と照魔鏡――『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』における「狐妖退治」の形成をめぐって
一、問題の所在
二、本朝部分における「狐妖退治」話型
三、照魔鏡の摂取
四、中国白話小説における照魔鏡
五、玉藻前と照魔鏡との関わり
六、結語と課題
第五節　『絵本三国妖婦伝』における耆婆と移狐樹をめぐって――中国小説との関わりから
一、玉藻前と耆婆
二、『絵本三国妖婦伝』における「耆婆による狐退治」
三、「耆婆による狐退治」の原型
四、『勧化白狐通』における『狐媚叢談』と『通俗武王軍談』の影響
五、結語
〈補説〉「華表照狐」の再分析
第六節　玉藻前と同形二人――『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』から出発して
一、問題提起

二、同じ姿に化する玉藻前
三、近世の狐譚に現れる同形二人
四、「双面」の趣向
五、『今昔物語集』巻二十七第三十九話との類似
六、中国文学の影響
七、後世に引き継がれる同形二人
終　章
一、近世における玉藻前説話の総括
二、中国文学の影響
三、近世文学史発展の一側面
四、今後の展望

３、本論文の概要

序章において、近世以前の日中両国の狐変妖婦譚の歴史、玉藻前説話の源泉と展開について概括し、長期にわたる日中の文学交流の中で近世に生まれた話譚の変容に対する考察の意義と問題点を提起する。玉藻前の前身となる狐変の妖婦に殷の妲己が参入するにいたる展開の様相を探ること、とりわけ中国文学を滋養とする変容の考察の重要性を指摘する。

第一章「始動期の様相」では、『勧化白狐通』の出版以前の玉藻前説話の特徴、および中国講史小説を和訳した『通俗武王軍談』の翻訳に焦点を当てる。この時期の玉藻前説話は、主に「玉藻の草子」を踏襲するが、近世初期の中国小説の伝来および流通により、妲己の故事が認識されて玉藻前説話に浸透しはじめる。

第一節「明和以前の玉藻前説話」では、『勧化白狐通』（明和三年〔1766〕刊）以前の玉藻前説話の特徴を洗い出す。陰陽書の『簠簋抄』をはじめ、狂言『狐川今殺生石』、浄瑠璃『殺生石』、『那須野狩人 那須野猟師 玉藻前曦袂』、および八文字屋の浮世草子などの作品を取り上げ、この時期の玉藻前説話を概観して、その特徴を探る。明和以前の玉藻前説話は、『簠簋抄』に「夏の梁王ニテハ且嬉」との殷の妲己と思われる記載を認めるものの、基本的に狐変妖婦の系譜は「玉藻の草子」における「塚の神→褒姒→玉藻前」の三国変転の枠組を越えない。ただ、『那須野狩人 那須野猟師 玉藻前曦袂』の冒頭に妲己にまつわる記載が認められることから、狐変妲己がすでに玉藻前説話に浸透し始めたことを推察する。この狐変妲己の故事は、近世初期の中国小説の伝来および流布と無関係ではなく、元の『新刊全相平話武王伐紂書』や明の『狐媚叢談』、とりわけ明の『春秋列国志伝』を翻訳した清地以立の『通俗武王軍談』に載る「妲己譚」（巻一～巻四）が大きな取材源となって、玉藻前説話の流行に拍車が掛かったと指摘する。

第二節「『通俗武王軍談』の翻訳――妲己譚を中心として」では、『通俗武王軍談』（宝永二年〔1705〕刊）の「妲己譚」（巻一～巻四）に注目して、清地以立の翻訳について考察を行う。『通俗武王軍談』は近世の多くの玉藻前をテーマとする作品に利用され、玉藻前説話の発展に大きく貢献することになるが、この『通俗武王軍談』の翻訳の底本は、従来、『春

秋列国志』の二系統あるテキストの内、『新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝』（「新鐫」本）と目されてきたが、比較分析を通して、もう一つの系統である『新刊京本春秋五霸七雄全像列国志伝』（「全像」本）の内容が『通俗武王軍談』に反映されている事実を明らかにした。翻訳時のその併用とともに、以立の訳業が単純に底本に依拠した逐語訳ではなく、面白みを追求する姿勢が認められるものであったことを考察する。

第二章「転換期の様相」では、主に『勧化白狐通』と『三国悪狐伝』の二作品を対象として論じる。この期の玉藻前説話は、「始動期」に現れた萌芽を育み、「玉藻の草子」の天竺・唐土・日本の三国伝来の着想を継承しつつ、狐変妖婦の系譜に妲己を加えて新たな発展を見せる。

第一節「『勧化白狐通』の位置：継承と発展」では、『勧化白狐通』（明和三年〔1766〕刊）が、如何に従来の玉藻前説話を継承・発展したかを考察する。陰陽師安倍泰成の奏聞の中に天竺の話譚を挿入した『勧化白狐通』の話容は、著者の僧海誉が「玉藻の草子」の内容を継承しつつも、天竺部分を大幅に膨らませて三国物の形を変革する意欲を示したものと解釈する。また海誉は、玉藻前と安倍泰成との論争および術比べの内容を『通俗武王軍談』や『狐媚叢談』から借用し、登場人物に新たなイメージを付与する。のみならず、『仏説仁王般若波羅蜜経』、『仁王護国般若波羅蜜多経』、『賢愚経』などの仏典に加えて『簠簋抄』を援用して、斑足王と普明王との内容に新味を織り込む。そして「玉藻の草子」の「塚の神→褒姒→玉藻前」の狐変妖婦の系譜に妹喜と妲己を連綴して、「妹喜→妲己→花陽夫人→褒姒→玉藻前」の新たな系譜を創出する。ただし、『勧化白狐通』では妲己は名を連ねるだけで、具体的な話譚は語られず、その話譚の発展は持ち越されたことを考察する。

第二節「『三国悪狐伝』の伝本について」では、調査し得た二十六本の『三国悪狐伝』（一名『悪狐三国伝』）の伝本に基づき、『三国悪狐伝』の祖本をめぐって考察する。『三国悪狐伝』は、いわゆる実録的写本であるため、成立年次と作者は定かではない。伝本の中で「寛政九年〔1797〕」「山野辺周卜撰之」の序のある写本の年記が一つの成立の目安となると考えるが、この序をもつ伝本が必ずしも祖本の姿を有するわけではない。また、二十六本の伝本の「内容の相違」、「標題の位置」、「表現の相違」、「注記の多寡」を考察し、甲・乙・丙の三系統に分類するとともに、甲系統にのみ記される第十条の注記と、乙系統の第十七条の注記に着眼する。第十条の注記は、耆婆が花陽夫人の正体を暴くのに用いた「薬王樹」をこの書が「野狐樹」に改めた理由を述べるもので、創作意図を自ら注釈した注記である可能性が高いとする。また、乙系統の第十七条の注記は、玄翁に教化された殺生石にまつわる安芸国の玉藻大明神に関する甲系統の記述に、当地での「予」の見聞を追記したものであるとする。こうした注記に対する視点から系統間の関係性、引いては甲系統が乙系統より祖本に近いとの可能性を推測する。

第三節「『三国悪狐伝』と近世の狐譚」では、『三国悪狐伝』が如何に先行する狐譚を利用しつつ、改編を行ったかについて論じる。『三国悪狐伝』は、「玉藻の草子」に登場しなかった妲己の話譚を巻首に据え、かくて狐変の妖婦は「妲己→花陽夫人→褒姒→玉藻前」の順に変転する形が現出する。これこそ従来にない画期的な変容として重要である。のみならず、『三国悪狐伝』が『通俗武王軍談』や『勧化白狐通』、『安倍仲麿入唐記』の影響を

受けることは従来指摘されていたが、新たに『通俗呉越軍談』、『安倍晴明物語』、さらに近世に刊本として刊行された「玉藻の草子」などを利用することを明らかにする。『三国悪狐伝』冒頭にある天地開闢を語った文言は、『通俗呉越軍談』巻一に見える伍子胥の詩に依るもので、人間界を征服しようと企む狐妖の魔性を際立たせる。『通俗武王軍談』における太公望が用いる照魔鏡を登場させるが、その来歴を語らないので、『三国悪狐伝』は太公望が我鬼先生より与えられたと照魔鏡の入手の経緯を補説する。『勧化白狐通』ゆかりの「足止の法」、さらに『安倍晴明物語』の中国に渡った吉備真備が野馬台詩に難渋して長谷寺観音の名号を唱えるなどの考察を試みる。

第三章「隆盛期の様相」においては、この話譚の読本の双璧にして、東西一対をなす『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』について論じる。三国伝来の狐変妖婦譚を読本としてそれぞれに構築した二書は、この話譚の沸騰の起爆剤となる。

第一節「『絵本三国妖婦伝』の「修飾」をめぐって」では、『絵本三国妖婦伝』（享和三年〔1803〕上編刊、同四年〔1804〕中編刊、文化二年〔1805〕下編刊）の著者高井蘭山による「修飾」、すなわち潤色加工の様相をめぐって掘り下げる。『三国悪狐伝』を種本とし『通俗武王軍談』に依拠する蘭山の加工は、ほとんど措辞の潤色にある。しかし、玉藻前の形象は『三国悪狐伝』とは異なり、王威に服従して、陰陽師・安倍泰親の法術に対抗し得ない無力な形象化がなされる。このような改変は、狐妖が神国日本においてはあくまでも下位の存在で、常に有徳の人に勝り得ないという蘭山の考えを反映すると指摘する。また、蘭山は登場人物に、「仁・忠・孝」の儒教的道徳を新たに付与し、「戒色」の教訓性を作中に溶け込ませる。こうした蘭山による「修飾」の特徴を考察する一方、「褒姒譚」については『三国悪狐伝』と『通俗武王軍談』の内容を融合した叙述の方法をとることを指摘する。

第二節「『画本玉藻譚』生成考――狐変妖婦説話との関わりを中心に」では、『画本玉藻譚』（文化二年〔1805〕刊、岡田玉山著と題す）に注目し、主に先行する狐変妖婦譚との受容関係、および『画本玉藻譚』の著者が施した独創的な加工を考察する。「妲己譚」において、ほぼ逐語的に『通俗武王軍談』を受容すると同時に、費仲などの人物を簡略化し、話題を妲己に集中させる。「花陽夫人譚」では、『勧化白狐通』を利用しながら、『通俗武王軍談』に登場する紂王の像を斑足王に投影する。さらに、「玉藻の草子」の記述から源頼政の「鵺退治」を「玉藻前譚」に盛り込み、物語として内容の豊かさを求めている。従来、必ずしも鮮明でなかった『画本玉藻譚』と『三国悪狐伝』との関係性についても、解明を試みる。「玉藻前譚」の終盤において、玄翁の説法を受けた玉藻前が自らの誕生を物語る中の「天地の開けざる時」に誕生する内容や、「人をして魔界に入」らしめんとする記述が、『三国悪狐伝』の狐妖が「天地開闢」の際に生まれ、本朝を「魔国」にせんとする内容と類似する点に着眼し、『画本玉藻譚』が『三国悪狐伝』の影響を受けたことを考説する。

第三節「『画本玉藻譚』生成続考――三国物を為す手法に着眼して」では、『画本玉藻譚』の著者が如何なる手法を以て、三国物としての物語を仕上げたかを考察する。「妲己譚」では『通俗武王軍談』に依拠すると同時に、軍談物に頻出する漢詩を残して漢土の趣を保持する一方、炮烙や蠱盆などの所行を描いて妲己の残酷無道なイメージを創出する。「花陽夫人譚」では、普明王の口を借りて仏国の性格を言い表しつつ、仏の光によって剣が寸断さ

れたり、狐が体内に入る夢を見るなど、仏典に由来する内容を多用する。かつ、花陽夫人が仏法を嫌忌し、信者を虐殺する内容を配して仏法とは不倶戴天の人物像を作り、弥陀三尊の仏光による花陽退治の結末によって仏国の性格を強調する。本朝の「玉藻前譚」は唐土・天竺と様相を異にし、怪異の色調が濃密に現れる。藻を被る狐の変身の様態を描き、鳥羽院の前身という蓮華坊にからむ三十三間堂創建説話を盛り込み、玉藻前の尋常ならざる妖異を強調する。終盤には、殺生石の教化を試みた沙門石屋の失敗譚に安達原の黒塚伝説の謡曲『黒塚』を融和させ、巧みな玉藻前の怪異の演出について指摘する。

第四節「玉藻前と照魔鏡――『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』における「狐妖退治」の形成をめぐって」では、二つの読本の唐土と本朝部分に登場する照魔鏡について論じる。両書の唐土部分の照魔鏡による「狐妖退治」は、『通俗武王軍談』を襲用するものではあるが、本朝部分の照魔鏡による「狐妖退治」の話型は、『通俗武王軍談』を積極的に利用した『勧化白狐通』に発想され、『三国悪狐伝』を経由して定着するにいたる様相を考察する。この間、元の『新刊全相平話武王伐紂書』や明の『西遊記』『封神演義』『狐媚叢談』などの中国白話小説に登場する照魔鏡にも言及し、これらの中国小説の日本伝来による故事の流通流行と相俟って照魔鏡の霊力が広く認知され、斬新な話題として受容されたものと考察し、『別国洞冥記』や『抱朴子』に載る照魔鏡の源泉にも言及する。

第五節「『絵本三国妖婦伝』における耆婆と移狐樹をめぐって――中国小説との関わりから」では、『絵本三国妖婦伝』に登場する「移狐樹」という霊木の趣向をめぐって考察する。この霊木によって狐妖の正体を暴く趣向は、共通する内容をもつ『三国悪狐伝』に依拠するが、その趣向は『勧化白狐通』に遡り得るものである。『勧化白狐通』は、仏典における耆婆と薬王樹との繋がりを利用し、かつ題材を得ることの多い『狐媚叢談』から「華表照狐」の霊木による狐妖退治のモチーフを発想して融合することを指摘する。また、この話は耆婆が花陽夫人を診脈することを発端とするもので、この由来も『三国悪狐伝』から『勧化白狐通』に溯り得ると同時に、『勧化白狐通』が『狐媚叢談』所載の「西山狐」における元の医者范益の同様の話を摂取したものと考察する。

第六節「玉藻前と同形二人――『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』から出発して」では、二つの読本における「同形二人」の趣向に注目し、その生成について考察する。狐妖が人間の姿に化して本物の人間と同じ姿で同時に登場し、いずれが本物か識別できないという「同形二人」の内容は、その直接の源泉を『勧化白狐通』に求められるが、内容の類似性から『今昔物語集』巻二十七第三十九話を吸収して創案するとも考察する。『勧化白狐通』の成立以前の『泉州信田白狐伝』や『芦屋道満大内鑑』、浄瑠璃『殺生石』など、近世の狐譚にはすでに狐妖が同じ姿の人に変じる趣向が見え、かつ『双生隅田川』、『弘徽殿鵜羽産家』、『赤染衛門栄花物語』などの作品には、同形の人間に化する「双面（ふたおもて）」の趣向を認める。これらの趣向に刺激されて、「同形二人」を作中に織り込むと指摘する。中国の古典作品にも、唐代に成った『朝野僉載』には、狐妖が同形の人間に変身する話が記載され、唐代伝奇小説『離魂記』にも、人の魂魄が肉体から抜け出して他所で人間の姿で生活する、いわゆる「離魂」と称される特殊な「同形二人」が記される。これらの漢籍の日本伝来と受容にともなう発想が、この内容の形成に影響するとも考察を加える。

終章では、近世の玉藻前説話に関する考察を章ごとに略説する一方、改めて近世に出現する「妲己譚」が中国小説によることを再確認し、論者が生まれ育った国である中国の小説自体に対する更なる探究、自ら設定した「始動期」「転換期」「隆盛期」に続く「余響期」の研究の推進を期して結びとする。

４、総評

近世の玉藻前説話を対象として研究を推進するには、当然のことにその前代となる中世の考察は論考の基礎を作る上で必須である。本論文は、この基礎研究にも力を尽くし、日本と中国の狐変妖婦譚の様相を文献（出土文物を含む）によりながら跡づけ、御伽草子の「玉藻の草子」や謡曲の「殺生石」のテキスト・内容を掘り下げ、その基礎に立脚して近世の考察を展開することは、まず一つに評価し得る点である。

近世の時代にあって、本論文が設定する「隆盛期」のすぐ後の時代に滝沢馬琴は『燕石雑志』（文化八年〔1811〕刊）巻一「恠刀禰」に付帯する「九尾」のなかで、玉藻前の話譚の展開を説いては「九尾の狐といへば妲妃（たつき）玉藻が事なり、と儂子（わらはべ）も合点せり。」という当時の話譚の一大ブレイクに言及している。まさにその言説にある「九尾の狐」「玉藻」「妲妃」にまつわる探究こそ本論文の考察上の重要な課題となるものに他ならない。「始動期」「転換期」「隆盛期」における時代的な変革の動きを丹念に洗い出していく作業は、考察の対象がジャンルを越えて広範の複数の作品に及ぶだけに新たな知見を含む貴重な考察となっている。

第一章の「始動期」の考察において注目すべきは、玉藻前説話の発展に大いに貢献することになる『通俗武王軍談』の翻訳を丹念に分析した点である。『那須野狩人 那須野猟師 玉藻前曦袂』の冒頭に焦点を当て、『通俗武王軍談』の確実な影響を明らかにする一方、『通俗武王軍談』の飜訳の底本が『新鐫陳眉公先生批評 春秋列国志伝』（「新鐫」本）のみならず、『新刊京本春秋五霸七雄全像列国志伝』（「全像」本）を併用した可能性を突き止めたことは、通説に対する新見解として重要である。

第二章の「転換期」では、『勧化白狐通』と『三国悪狐伝』の二作品による玉藻前説話の変貌の様相を追究する中で、従来の研究に不足していた『勧化白狐通』への内容的な掘り下げを推進し、かつ『三国悪狐伝』の調査し得た二十六本の伝本に基づく三系統の分類、十七条の注の分析・整理は、両書が果たした役割の論考にも有効に働いている。足繁く研究機関で蔵本を調べ、自らも古書肆を訪ねて収集に努めた伝本調査の成果といえる。

それらの検討がまた第三章の「隆盛期」の二つの読本をめぐる考察を明解にする要素にもなっている。この近世の玉藻前説話の集大成ともいえる『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』の作品の特徴と成り立ちの特性を実証的に洗い出し、照魔鏡・移狐樹・同形二人などの作中の趣向をめぐって、日中両国の文献に基づいてその生成の過程と作中への援用の様相を追究したことも、両作品の研究に新しい視点を示している。

本論文が考察に用いる日中の文学作品や文献は、それらの多くが未だ翻刻や注釈が完備しない環境にもあり、先行研究に導かれつつ、自ら作品や文献に向き合って精読・注解する不断の努力あっての論考といえる。また、漢文資料に対しては、その解釈を示すために日本の伝統的な漢文訓読法を身につけることも必要であり、日本の古典文献に向き合うに

は、変体仮名・くずし字の読解力なくして調査研究は前進できず、論文化にあっては日本語の表現に留意することが必要にもなる。留学生としてこれらを乗り越えて、四〇〇字詰原稿用紙に換算して七百数十枚に及ぶ大部の論考をまとめ得たのは、何よりも本人の研究への真摯な取り組みがあればこそである。

「寛政九年〔1797〕」の年記をもつ『三国悪狐伝』の序自体の分析・考察、その伝本の分類ならびに注の考察への更なる吟味、そして二つの読本の内容構成と成立事情をめぐるより細密な考察の展開が大いに期待される。これらは瑕疵となるものではなく、更なる検討に基づいてより論考に説得性を増し得ることを期待するものである。序章・終章を除いた都合三章十一節の論考の中で、既発表の論考は四節分であり、今後新たに充実した論考が展開されるとともに、「始動期」「転換期」「隆盛期」に続く「余響期」への研究的アプローチも期待される。

上述してきた通り、本論文は学術的に十分に評価し得るものであり、公開発表会を含めた審査の結果、審査員一同、本論文が「博士（学術）」を授与するに相応しいものと判断したことを、ここに報告する。